

なのはな通信

第19号 2009.3



編集・発行
勤医会東葛看護専門学校

〒270-0174 千葉県流山市下花輪 409

TEL 04-7158-9955 FAX 04-7159-7055

発行責任者 石倉 啓子



新入生生活で 撮影小林功

共感と「支えあい」の中で

成長するのが学校



校長 山田 功

私たちの学校は創立以来、東葛地域や東京民医連の協力の元にそのフィールドに出かけて行き、生活や労働の実態の中から、患者さんの背景を学ぶ学習を大切にしてきました。私はこの学びに参加した時「ここには知識を学ぶだけでなく、心の響き合いがある」と痛感しました。

農家を訪問した時に「農業はね、子どもを育むように優しく毎日声をかけ、作物がしゃべれない分こちらが変化を見ていかないと大変なことになるんだよ」と話されると、その話しは「いのち」と向き合っている看護学生の心にピンと響き、生き物や人間に対する見方を豊かにしてくれます。

町工場や自営業者を訪問した時に「いくら学問をやっても、それだけでは物は作れない。現場に全てがある」「だから高い所から『患者さん』と言っても駄目だ。同じに悩むことだ」と、自分の仕事の誇りを看護の仕事に重ねて話されると、看護師として生きる人生観が又膨らんで行きます。ある卒業生は地域フィールドで、不況による経営困難を知り、まじめに働いている人々の胃腸障害や自殺者まで出ている事を知って、悔しくてたまらなくなり「医療は、一人ひとりの人生を総合的に応援する営みであると考えようになった」と雑誌『現代と教育』に書いていました。

こうした「地域に出る学び」を昨年の夏、京都で全国教育研究集会が開かれた時に「地域に支えられて学ぶ看護学生」という題で、本校の先生方が発表をしました。すると小中高校の先生方から「すごく自分達と共通している」と言われ、たちまち共感しあう空気が広がりました。ある岐阜県の小学校は「カジカがいなくなった川」の歴史を学び、ある千葉市の小学校は「野原の探検隊」という学習をして、小さい時から「自然やいのち」の大切さを発見する実践をされていたのです。その方々が「この子どもたちの学びが大きくなった時に、どこへ繋がるのかが見えて来たような気がする」と言って喜んで下さいました。

今年は地域と繋がり、命を大切に「共感し、響き合う」学校が、東葛地域にも広がっていく、そういう変化の予感がしています。

2008年世界大会 平和ゼミナールからの報告

私たち平和ゼミナールは、今年の夏の行動に向け、六月末に『平和』をテーマにした学習会を企画しました。核実験が世界でこんなにもたくさんされていたことにびっくりしました。

そこで、やっぱり今年も原水爆禁止世界大会に、生徒代表を送り出したいと思い、準備を始めました。

そして、今年の原水爆禁止世界大会に学生三名と、先生一名、個人参加一名が行ってきました。

そこで感じたこと、学んだこと、帰ってきてからの話し合いで思った疑問などを調べ、平ゼミのメンバーでレポートにし、報告しました。その一端（感想）を紹介します。



原水禁大会に参加して

今回の広島の旅を通して、様々な話を聞く事が出来た。その中で原爆というものは、なにもプラスにならないものなのだなと思った。その当時のアメリカは日本との戦争に勝って、そこではプラスになったのかもしれないが、今はどうだろう。なぜ核を放棄しないのか。なぜ原爆を日本に落としたのかと非難されているのには間違いない。今となっては大きなマイナスになっているのではないだろうか。被害者の方たちの話を聞けば聞くほど、私達と同じ人間が犯した罪なのだと考えると、とても悲しい気持ちになった。

（1科一年生 鳥山 友美）



原水爆禁止

～核兵器のない世界へ～

今回の原水禁大会は、『私は何故戦争に反対し、核兵器廃絶のために行動していたのか』を考える旅となった。私たち看護学生は、人間の体が生きるためにもつ様々な精密な仕組み、命の驚異的なパワーを学び、また、患者さんに付き添う中で命の重さを体感し、また一つの命のまわりには家族、友人、仲間など、沢山の命が支えあっていることを教わる。そうした命が、周囲の人達の生活が、突然に理不尽に狂わされる戦争や核兵器を、命を守る現場を知るもの一人として、許すことは絶対に出来ない、と、強く感じた。

(1科二年生 治田 美德)



初めての広島、そして原水爆世界大会という事もあり、一から学んでみたいと思っで参加した。町の印象は想像とはまったく異なっていたし、始めて生で見る原爆ドームからは原爆の恐ろしさを知った。原爆資料館では、当時の焼け残った物や戦争についての資料が沢山あり多くを学ぶことが出来た。是非また来たいと思っだし、他の人

にもつと知ってもらいたいと思っだ。原水爆禁止世界大会の開会式・閉会式に参加して、『戦争を無くそう、原爆を無くそう』という気持ちが凄く伝わってきた。こんなにも多くの人が国を超えて平和について考えていたとは知らなかった。全てが初めての体験だったが、さらに学びたいと思う広島の旅だった。

(1科二年生 今泉 宏二)

看護師になってまだ間もない頃、母親の胎内で被爆して知的障害をもって生れ、線維腫という癌に侵されたSさんに出会った。すでに戦争が終わってから、四十数年もの月日経っていた。Sさんは激しい痛みに襲われ、死ぬ最期の瞬間まで苦しみ抜いた。

「痛いよー、痛いよー、注射してくれよー」

注射をしても、ほんの数十分しかもたない。私はどうしていいか分からず、涙をこぼしながら、ひたすら痛む足をさすってあげることしかできなかった。無力な自分がとても情けなかった。

「誰か他の人に代われないの？」

Sさんは、痛みに耐えながらも私を優しく遣ってくれたが、夜勤だったので誰も代われない。暗闇の病室で足をさすりながら、私はSさんを苦しめている原爆を、そして戦争を恨んだ。

夜勤が明けた次の日、私は出張のため熱海の宿に泊まっていたが、Sさんの容態のことが気になっていた。翌朝、友人が血相

を変えて私に言った。
「今朝早く、あなたの枕元に男の人が立っていたのよ」

職場に戻るとSさんはすでに帰らぬ人となっていた。それはちょうど、友人に霊がいたと言われた朝のことだった。

Sさんは、たった四十数年の短い人生をどう生きてきたのだろうか。家族もなく、たった一人で淋しく亡くなっていったSさんが、私は可哀想で、ただ悔しくてならなかった。

私は原水禁世界大会に参加して、亡くなったSさんとの悲しい思い出をかみしめた。亡くなる時、枕元にたったSさんは、私に核兵器をなくして欲しいと言ひ残していったのではないだろうか。二度と再び、自分のような被害者を出してはならないと、叫んでいたに違いないと思っだ。

私に何かできること。

世界中の皆でその一歩を踏み出せば、きっと未来は変えられる。Sさんの思いを胸に私も微力ながら、努力していきたいと思っだ。

(1科教員 斉藤 みゆき)



学生と共に 歩んだ一年 1科1年生

△交流合宿▽

二〇〇八年四月二十三日の交流合宿はみんなの看護学校入学に対する思い・目標が明確に確認できるものになった。最初はまだ入学したてで出会って間もなかったのでも、みな気を遣いあいよそよそしい雰囲気での漂う感じではじまった。しかし、交流合宿の課題でもある「何故、看護師を志すのか？」というテーマについて話し合うとみな真剣な表情をしながら、そして明確に自分の気持ちを話し始めた。

親が看護師をしていてその背中を見て育ち、自分も志そうと考えた人、小さい頃に自分が入院して実際に看護師さんに接して憧れを抱き自分もなろうと決意し、入学した人。もともと医療業界に携わっていて、スキルアップのために入学した人など各自

看護師を志す理由はさまざまだった。

しかし、きっかけは違っていても志しているものはみな同じ「看護師」だということを実感でき、同じ目標に向かって頑張っていく「仲間」なのだということを確認できるものであった。同じ志を持った仲間としての絆を深めることのできる充実した交流合宿となった。

△体育祭▽

六月六日（金）流山運動公園にて体育祭が行われました。各クラス、一丸となれるよう、お揃いのTシャツを身に付けての参加でした。ドッジボール、バレーボール、綱引き、百足競争、選抜リレーの種目がありました。最初は楽しく行っていました。が、どんどん白熱していき、勝ちを意識してプレーするようになりました。私たちはまだ入学したばかりだったのでクラスとしてのまとまりはありませんでしたが、プレーする人、またそれを応援する人が「勝つ」という同じ気持ちになれたことは、私たちのクラスに生まれた初めてのまとまりでした。しかしやはり、二年生や三年生の中にある、グループワークで養ったチームワークは素晴らしく、ドッジボールや百足競争ではとても息の合ったプレーで圧倒させられました。結果、優勝はできませんでしたが、クラスにまとまりが生まれたことは優勝以上に大きな成果があったように思います。汗をたくさん流し、みんなで大きな声を出して応援したり、体を動かすことはとても爽快で開放された気分でした。





△東葛祭▽

学年を越えた縦割り編成で各係が分担され、先輩と関わる事が多く、初めのうちはとても緊張しました。先輩が実習中のため、一年生でリーダーを任せられ責任ある仕事を果たす人たちがいました。初めての経験で手探りの準備の中、メンバー全員が十分に理解してはくなく、メンバー同士がぶつかってその度に今後どうしていくか話し合ったこともありました。そして、そこから協力すること、情報を共有することの大切さを学びました。周りの先輩や友達、先生の支えがあり、何よりも各担当の人たちが責任を持ってやろうと周りに声をかけることにより、当日は出店・フリーマーケット・お化け屋敷・小林さん写真展など、全ての縦割りで楽しむことができました。また地域の方々ともたくさん話すことができ、自分たちの視野を広げることができ

ました。今回の東葛祭を通して、責任感が芽生え、計画性の大切さ、協力することの大切さを学びました。

△キャッピング▽

十四期生らしいキャッピングをしよう！と決意文を中心にBGMや並び順などを私たちはクラスで話し合いをしてきました。決意文では、社会人が多いことで発言しにくいこともあれば、話し合いなどで良い発言が多くあつたことや、今クラスの状態を素直に表すことができました。クラス全員で歌った「世界に一つだけの花」は、みんなが歌える歌をみんなで考えることができました。しかし、またその途中で、いくつかの苦悩もありましたが、クラスみんな多くのアイディアを出し合うことができ、話し合いの難しさや皆さんの意見を一つにする大変さ、またお互いを支えあう、助け合う大切さを学ぶことができました。先生方にも困った時や悩んだ時、BGMなど助けて頂きました。そんな先生方、クラス全員力で本当に良い形で本番を迎えることができました。本番では先生や保護者の方々・先輩方に見守られながら一つ一つに緊張感を持つて行きました。戴帽では、一人一人のキャップがとても重みのあるように思いました。キャッピング通して私自身も終わって行く楽しさ、大変さを学べたこともありました。学びあいながら患者さんも気持ちや願いに気付き、患者さんのために何ができるか考え、患者さんの立場にたった看護師を目指しながら頑張っています。

(十四期生一同とクラス担任 高田澄子・斉藤みゆき)





体って本当に凄いと思うのと同時に、側で応援したいという強い思いでいっぱいになった。

実習最終日に患者さんが「二人がいてくれなかったらここまで頑張れなかったと思う。そしてこれからは二人が側にいなくても頑張って治療と向き合っていくから、本当に支えてくれてどうもありがとう。」と泣きながらいって下さったあの言葉に自分自身救われた思いでいっぱいになった。自分は患者さんの力になれていないのではないのか、もっと力になることはないだろうか。と日々悩んでいた私達に掛けて下さったあの言葉を私は一生忘れないと思う。実習期間中いつも気に掛けてくれ、本当にたくさんのお優しいと元気を下さった患者さんに感謝の気持ちでいっぱいである。患者さんが一日も早く回復し、元気になってくださることをこれからも陰ながら応援していきたいと思っ

精神科

精神科実習に行き保護室体験をした時

「保護室は狭いな、圧迫感がある」と思い、たった二十分間その空間に入っているだけでも苦痛でした。しかし患者さんと関わる中で「保護室に入ったら落ち着いたんだ」という話を聞き、保護室は閉じ込めるという意味ではなく、幻聴や幻覚で左右されている患者さんを現実の世界に引き戻すために大切なのだと再確認できました。また、患者さんは病気になることで色々なことが学べ、病気を通してプラスになれたと話してくれました。病気になったらマイナスになってしまわないかと思っていたけれど病気を通してプラスになることがあるのだ、病気はマイナスな面ばかりではないのだなと自分自身も思っていたイメージが患者さんと話すことで変わりました。

精神科実習は患者さんと関わる中で、またグループメンバーからの患者さんとの関わりからも多くのことを考えさせられ、自分自身を見つめなおすことができた実習でした。

各論では母性・精神・小児・外科の四つの分野で実習を行った。各論での学びは本当に大きく、メンバーとのカンファレンスの中で意見交換をすることによって自分と向き合うことが出来たり、また自分の足りなかつたところにも気が付くことが出来た。実習中、日々の実践に対して悩み・行き詰まって一人で突っ走ってしまい、周りが見えなくなってしまうこともあった。グループでの話し合いでも一人孤立したような気になって、自分の意見が言えなくなつた時もあった。しかし、そんな時はそのま

まにするのではなく、グループの中で話し合いを設け、悩んでいる人の話を聞き、他人事ではなく、自分たちの問題として考えていった。悩みを相談できたこと・意見が合わずぶつかったこともあつたけれど、自分と向き合い、他の人の意見を聞くことで視野が大きく広がった。辛いこともあるが、それが成長に繋がると学ぶことができ、本当に楽しく、学びの多い実習だつた。患者さんと接する中で看護をすること、人と接することはすごく楽しいと感じた。自分の看護観や看護に対する姿勢も沢山学ぶことができたと思う。この学びを忘れずに次回に生かしていければと思う。

また、私たちのゼミでの学びあいはとても活発で、意見が飛び交い「クラス全体で学びあう」という雰囲気だと思ふ。発表者に対する質問だけではなく、自分自身の実習と重ね、そのときの思いなど、共通することがあつたときはそれを交えた感想もたくさん出る。質問は質問をした人と発表者だけのやり取りではなく、他の人からも意見が出るし、クラスへの投げかけもあつて、クラス全体の学びに繋がっていると思ふ。自分たちは「ゼミ」というのはこんなもんだらう」という感じで受け止めていたが教員に1科2年生のゼミは活発だといわれ、なんだか誇らしかつた。これが1科2年生のクラスの個性だと感じた。

二年間を通して、東葛看護学校では、他の学校にはない学びが得られると感じた。それは、机上での学習が終わつた時点で実習に行つたことで実際の患者さんを通して病態を深めることができたり、また、レポート作成に関しても単に日々のまとめを

するだけでなく、患者さんの思い・自身で考えた内容などを時間をかけて振り返り、作成していく。それに対して教員からも一人ひとりアドバイスや指摘を受けることができ、それが更に学びを深めることに繋がっていくのだと思ふ。

これから私たちは最終学年になる。三年次は、普段の学習だけでなく、国試を視野に入れ今まで以上の努力と勉強をしていきたい。そして、これまで培ってきた知識と技術、また、見えてつづある自身の看護観を大切に、常に自分を振り返り、一人ひとりの患者さんと接していきたい。これからは沢山の困難があると思ふ。しかし、十三期生のメンバー全員で同時に卒業でき、国試を通過し看護師になれるよう頑張りたい。

(十三期生一同とクラス担任 江島典子・江藤ちひろ)



学生と共に 歩んだ一年 1科3年生

一科十二期生での三年次の学びはとて大きいものになりました。

三年生になりすぐに群馬にあるハンセン病患者さんの療養施設である、国立ハンセン病療養所栗生楽園を訪問しました。

今もなお二百人の方が暮らしている施設の代表のゆさんに、大変貴重なお話を聞かせていただきました。当時の人間としては扱われなかった話を聞き現実にあつたとは思えないようなことばかりでした。

雨の中にもかかわらず、園に隣接する特別病室「重監房」の跡で「一九四七年に廃止されるまでの九年間、ここで二十二人が凍死、衰弱、自殺で亡くなりました」との説明に、みんな静かに耳を傾けていました。

真冬は気温マイナス十六度、かけ布団は一枚、食事は一日にぎり飯二個だけ、反抗したりすると収容されました。「自分たちの体験した苦難を繰り返させたくない」という強い思いが伝わり、施設跡を目の前にしてとても心に響きました。

ゆさんの「医療者が正しいと思いたいことだと思ひ込んでやっていることもこちらにしてみれば迷惑だ」という言葉を聞き目の覚める思いでした。

医療従事者を志すものとして絶対に繰り返してはいけない事実なのだ改めて感じるとともに、本当に今の自分のしていることは正しいのだろうか、常に考えることの大切さを教えていただきました。

老年在宅実習では、病棟で実習するグループと在宅を訪問したり、訪問看護師に同行し、現場を見学したり、施設で実習するグループに分かれて実習しました。病棟ではお楽しみ会なども開催し、学生も一緒

に楽しませていただいた実習となりました。また初めての夜勤も体験し、夜間の人手不足の問題や労働の厳しさを、身をもって体験し、今の医療体制がもっとよくなればいいのにと考える学生が多くなりました。

在宅実習では最初にどんな実習になるかわからなく不安でしたが、実際に訪問してみても、病棟とは違い、その人がその人らしく生活しているところはとてもよいと思いました。しかし社会資源を十分に活用するには、お金がかかっています、みんなが最適なサービスを受けるにはまだ至っていないことを知りました。また私たちもしっかりと知識をもつていなければいけないと感じました。

そして夏休みが明け、学生生活最大のイベントである、研修旅行に行きました。韓国での研修旅行は「日本国憲法と平和と医療」というテーマで学びました。事前に韓国の文化、歴史、戦争、慰安婦についてなど学習していききました。そして現地での中央高校の学生との交流のとき、日本人に対してどんな感情をもっているのか不安でした。しかし「過去の問題については個人同士の問題ではないので、個人的な感情はない。アニメとかゲームとかとても楽しい。韓国人は日本に興味をもっていて、理解しようとしている。日本人ももっと韓国に興味を持って、韓国を理解しよう」とすれば、お互い良い関係が築けると思う

た。事前に韓国の文化、歴史、戦争、慰安婦についてなど学習していききました。そして現地での中央高校の学生との交流のとき、日本人に対してどんな感情をもっているのか不安でした。しかし「過去の問題については個人同士の問題ではないので、個人的な感情はない。アニメとかゲームとかとても楽しい。韓国人は日本に興味をもっていて、理解しようとしている。日本人ももっと韓国に興味を持って、韓国を理解しよう」とすれば、お互い良い関係が築けると思う



との発言がありました。また日本の学生と違い、国や民族が歩んできた歴史や事実に対する知識が統一されていきました。自分たちはあまりにも歴史や過去の問題に興味をもたず、知らなすぎる部分もあるのではと思ひ、恥ずかしい気持ちになりました。

ナムムの家ではハルモニの話を聞き、ほとんどの学生が涙を流し、あまりにもひどかった当時の話を耳を塞ぎたくなくなるほどでした。ハルモニは思い出すのも苦しい過去を、涙ながらに話し「戦争が起きればまた



自分たちと同じような目にあう人が出る。これからの若い女性が同じ辛い思いをしないうような声をあげている」という発言がとても印象的でした。

翌日、毎週水曜日に日本大使館の前で行われるハルモニ集会にも参加しました。そこは世界各国から百五十人ぐらいの人が集まっています。ハルモニたちは「この問題は韓国、アジアだけの問題ではありません。被害は世界に及んでいます。日本は責任を負い、謝罪をするべきだ」と言っていました。高齢にもかかわらず、毅然として

「まだ若い」と笑うハルモニの姿は力強く、私たちも日本で真実を伝えていかなければならないと思いました。そしてナムの家への訪問とこの集会の参加により、日本が罪を認め、心から謝罪すること、二度とこういうことが起こらないよう平和な社会を創っていくことが大切だと改めて感じました。

西大門刑務所は今は歴史館として開館しており、当時の歴史が展示物やジオラマ、映像を通して学べるようになっていました。そこでは韓国の愛国心に燃える独立運動家たちが、拷問と抑圧に耐え抜いた歴史、獄中生活の実態が展示されていて、私たちも実際に壁棺の中に入り、体験してとても怖かったです。

私たちは戦争といえば広島・長崎などの原爆被害の歴史は学校でも教えられましたが、このような加害の歴史を知らないで過ごしてきました。この研修旅行を通して、自分が住んでいるこの国の教育に疑問を持ちました。そしていろいろな情報が氾濫する中で、自分たちは何が正しいのか、本当に大切なのは何なのか、見極めていくことが大切だと思いました。

この旅行は、これから先、私たちが生きていく中で、知らなければいけないことを教えてくれ、また大切な思い出となりました。

十二月には学生生活最後の総合実習を終えて、卒業論文を発表しました。最後の実習なので悔いのないよう全力で実習に臨み、患者さんから、たくさん学びをさせていただきました。三年間の集大成となる卒業論文を書くにあたり、三年間の学びから、自分が求めた看護を自然と考えることができました。またクラスでの友人関係



れからの国家試験に向けてクラス一丸となりがんばる決意をしました。

(二期生一同とクラス担任 名波すえ子・福井慶子)

や、その他の関わった人々より、いろいろな刺激をもらい、自分自身がこの三年間で成長できた実感できました。発表では今までの思いがあふれ、泣きながら発表した学生に、クラスみんなで寄り添い、思いをひとつにすることができました。そしてこ

学生と共に 歩んだ一年 2科1年生

もみのき新聞



二〇〇八年四月、四十一名の学生が入学してきました。看護第2科は准看護師の免許を取得した後、正看護師を目指すクラスです。年齢も准看護師としての経験も育ってきた環境も違う学生たちが一つの教室で『絆』仲間を思いやり、明るく、楽しく、共に学ぶ』を目標に一つの教室で毎日を過ごしています。

四月に入学してまもなく『仲間づくり』

という事で学校の体育館で合宿をしました。先日は在宅で生活されている方のお宅へ訪問させて頂き、そこで生活されている方のありのままを見て各グループで用紙にまとめて発表しました。

私が訪問したA君は二十代前半で筋ジストロフィーを患っていました。初めて対面した時A君は車椅子に乗りパソコンを操作していました。パソコンは腕の自由が利かないので左右第二指を使ってマウスを操作していました。私達はA君の姿を見て、どのように声を掛けて良いのか戸惑い、とても緊張した事を憶えています。しかし、A君は私達の緊張とは別に、「何か聞きたい事があったら質問して下さい」と、とても堂々とした態度で接してくれました。A君は音楽を聞くのがとても好きで、パソコンを使って作曲をする程でした。作曲をしている姿も見せてくれました。そして、年に何回か車椅子でヘルパーさんと一緒にライブに行くことがあると話してくれました。私が話を聞いて一番驚いたことは、A君が仕事をしている事です。仕事内容は得意のパソコンスキルを生かしたものでした。障害を持っていても仕事をして、給料をもらい、社会保険に加入していました。A君の生活は援助無しでは生活の送りづらさがあります。しかし、人生を楽しみたいと思う気持ちには私達と何も変わりません。

病気になったり、障害を負うともう普通の生活を送ることが出来ないと思ってしまうが、そんなことは無く病气や障害を持っていてもA君らしい生活を送ることが出来ると、今回の訪問で学ぶことが出来ました。

在宅で心豊かに暮らしている方々に出会え



て本当にいい学びとなり、また励まされました。そしてこの合宿では、まだ入学したばかりでなれない中、みんなで食事やレクリエーションなどを協力して作り上げる事で仲間意識などを高める事ができました。

四月の下旬、『生命活動の学び』の一環として田植えを行いました。流山の自然のすばらしさ、又その自然を地域の方がいかに大切に思っているかなどの話を伺った後、あぜ道を歩き、田んぼまで行き、田んぼへ入りました。ぬかるむ足場の中、クラス全員で声かけしながら、皆が一生懸命に苗を植えました。

楽しみながらも労働の大変さと、米がどのような場所、どのように出来て行くのかを学ぶ事が出来ました。収穫祭では、出来た米



を炊き込みご飯とオニギリにして美味しく頂きました。生命活動の初めとして、人間と自然の共存の大切さを学びました。

六月中旬から成人看護学の授業として『生活・労働フィールド』に取り組みました。ガラス工場の見学・自営業・工務店に行き一日体験をさせて頂きました。プロとして働いている方々から『仕事とは何か』そして『プロとしての仕事を行うためには健康である事が大切』労働と健康は切っても、切り離せない関係であると言う事なんだと知り、学ぶ事が出来、生活環境や背景も照らし合わせてみて行く事が大切な事も学ぶ事が出来ました。

田植えから始まった『生命活動』は現在八グループ（生命誕生・消化器・循環器・骨格・脳神経・内分泌・免疫）に分かれて私達の身体のすばらしさについて学び基礎

実習へとつなげて行きます。

基礎実習は基礎と言う事で『自分にとって土台となる』とても大切な実習になり、カルテを見ずに患者さんに密着する所から始まり、七十歳代の整形外科に入院された患者さんを受け持たせて頂きました。四十年魚屋に就き、朝の五時から夜の八時まで働いていた患者さんでした。そのため、老化とも重なり頸部にある脊髄神経が圧迫され、手足の痺れや歩行障害が出現し入院された方でした。患者さんはお孫さん、家族の待っている家に早く帰りたいという気持ちが強く、リハビリなど治療にも頑張っておられました。急激な回復は見込めないものの、患者さんの「早く家に帰りたい」と思う姿を目にし、患者さんのその気持ちを応援できるように援助して頂きました。退院に向けて一緒に喜びを味わうことができました。2科一年生全員が全く違う患者さんを受け持たせて頂きました。各々が患者さんの労働背景や生い立ちなどから個性を知ることにより、患者さんの願いを応援できるのだと学びました。今後に活かせる実習でした。

2科は二年間と言う短さのため日々の授業内容は盛り沢山です。日々の学習は大変ですが、上記にも書いた『絆・仲間を思いやり、明るく、楽しく、共に学ぶ』のクラス目標をもとにみんなで助け合いながら、楽しい学校生活を送っています。

2科十四期生を一言で表すなら体育会系のクラスです。明るく、助け合って担任の伊波先生と共に約十ヶ月という時間を過ごしてきました。正看護師になるための勉強は厳しく辛い事も少なくありません。二年という短い期間で看護の知識、技術、患者さんに接する態度や人間観、健康観、生命



の重さ、現代の医療についてなど膨大な量を学んでいます。これからもクラス目標「絆、仲間を思いやり、明るく楽しく、共に学ぶ。」を大切にしながら四十一名、同じ目標に向かって進んでいきたいと思えます。

(十四期生一同とクラス担任 伊波すみ子)

学生と共に 歩んだ一年 2科2年生



栗生楽泉園の「特別病室重監房」跡地を訪れました。
現在は基礎の部分しか残っていませんでした。

二年間の学校生活の中で多くの体験をし、たくさん貴重な学びをすることができた。

四月に行った栗生楽泉園草津療養所見学では、事前にハンセン病に関する本・資料を読んで訪問したが、私達は本だけでは知りえなかった事実を目の当たりにした。ハンセン病になったということで、人間としての尊厳など無視された扱いを受けた過去の事実を知った。冷たく暗い壁に囲まれた『特別病室（＝重監房）』の中で死んでいた人や過酷な条件のもとで労働を強いられた人。『人間回復』を求めて立ち上がった患者達の闘いは現在も続いている。ハンセン病は以前、遺伝性で感染症の高い病気と思われていた。進行すると顔や手足といった容姿に表われてしまうことから周

囲から隔離されていた。しかし、治療薬の普及や原因が明らかになった現在でも世間から敬遠される事実がある。それにも負けずに闘う人達の機動力となつている『人間の尊厳』の深さを知った。

クラス全員で参加できた沖縄研修旅行では、十月上旬でも暑く、滞在中、スコールの様な大雨に幾度となくみまわれ、亜熱帯地方特有の気候を体験した。

ひめゆり記念館を見学。ひめゆり学徒隊の生存者の方が館内の案内・説明をボランティアで行なっている。訪れる人に、今も忘れてはいけない当時の事実を伝えていくことを知った。

ひめゆり学徒隊で生き残った宮良ルリさんから貴重な当時の話を聞くことができた。講演する声は強くはつきりとしており、悲惨な体験は本や資料、映像を見るより何より強く深く感じる事が出来た。「平和はつくっていくもの」「教えられたことだけではなく、みなさんはしっかりと事実を見分けていってほしい」という言葉は二度と戦争をしてはならない、同じ過ちを起こしてはならない、後世に伝えなければという気持ちで伝わってきた。

沖縄は日本の中で唯一地上戦が行なわれ、集団自決という悲惨な歴史のあった場所でもある。沖縄戦の際、避難場所や野戦病院として使われた。そのガマの中の一つ、南部にある糸数壕（アブチラガマ）の



沖縄、辺野古にて。
全員で辺野古の海とジュゴンを守りたいという願いを込めて旗を掲げてきました。

中に入った。雨の影響で足元が滑りやすく足を踏み出すことにも恐怖を感じた。そして、懐中電灯を消し、数秒間、耳を澄ました。周囲に人の気配も感じることもできない程の暗闇だった。当時は排泄物と膿の臭い、負傷した兵士の苦しむ声が聞こえていたのだらう。死の恐怖と闘いながらも、生きていくことも辛かったのではないかと感

じる。ここでの体験から苦しみや悲しみしか生まない戦争は間違っていたとはつきりとと言えることができる。

普天間基地の代替地とされている辺野古はジュゴンの生息する自然豊かな場所だった。基地建設に反対するおじい・おばあ・地元住民の方達が座り込みと阻止行動で豊かな沖縄の海を未来に残すために十一年間闘っている。私達も一緒に頑張りたいと思いい、願いを書いた旗をつくり現地に掲げました。

六十三年経った今も沖縄では教科書問題や米軍基地の戦闘機等の騒音など、問題は山積みであり、戦争は終わっていないという思いを強く持った。それは、沖縄の人々だけの問題ではなく日本国民すべてが関心をもって取り組んでいかなければならないと感じた。

宮良さんは最後に私達に「パトントッチしましたよ」と話された。人の命の大切さを伝えるために私達医療従事者はこの言葉を忘れてはならないと強く思う研修旅行になった。

四月から各論実習、在宅実習、老年実習、総論実習を行なってきた。「患者の事実をありのままに捉えること」から出発した。患者さんに密着し生活史や思いを聞くことで、その人らしさが見えてき、患者さんに寄り添った看護ができることを知った。また、病態を学ぶことで患者さんの身体に起きていることを理解でき、患者さんの頑張りが見えてくるのがわかった。そして私たちは、患者さんの願いを実現できるようにと看護を行ってきた。

「家に帰りたい」「ご飯が食べたい」



小児科実習（健康学習会）

「正しい歯磨きの方法」を入院している子供達に劇で行いました。

等、個々に持っている願いを踏まえ看護実践を行なうことで治療力を高めたりADL拡大の応援が出来た。また、退院後訪問させていた、だくことで入院中だけでなく自宅に帰っても安心して生活できるようしっかりとサポートしていく継続看護が重要であることを学んだ。実習の最終日には健康学習会を行い、それぞれの病棟の患者さんに合わせた内容をとりあげ一緒に学習することで、治療に立ち向かう応援ができ、健康さを引き出すことが出来た。

総合実習では、これまでの実習中に受け持たせて頂いた患者さんから出発した課題

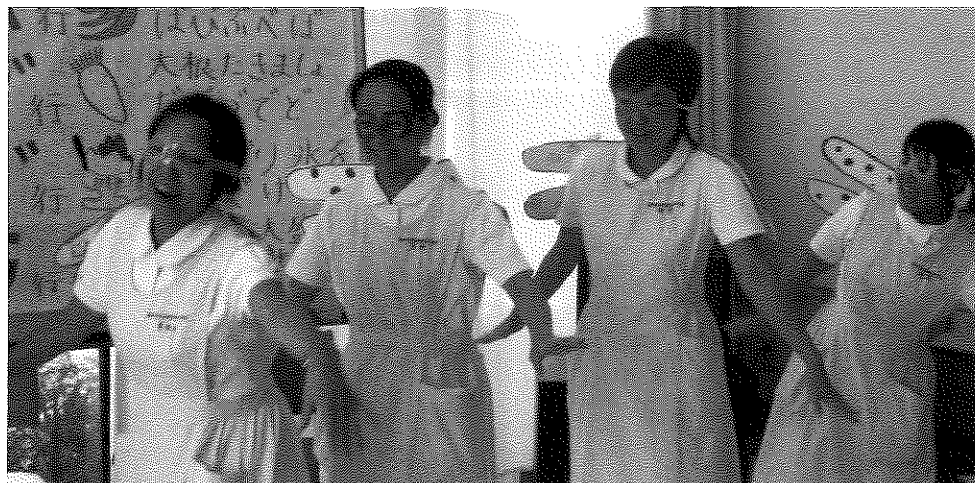
を、病棟の特徴、患者さんの事実、看護の実際から、日本の社会保障の問題点がみえてきた。憲法二十五条の意に反して、改悪が進み、十分な看護・介護が受けられない現実や、高齢者が高い保険料のために生活が逼迫している現状を知った。そして、患者さんの矛盾な負担を目の当たりにすることで、患者さんの深部の苦痛にせまることができた。

ハンセン病、研修旅行、実習など二年間の学びの一つとして、高齢者が戦後から今の日本を創りあげたことを知った。そして、国の発展だけではなく、自らの生活も豊かなものへと多くの国民が声をあげ、運動を起し、社会保障を確立させていった。しかし、今その保障が失われつつある。社会保障を充実させ、みんなが安心していらしているような国になるよう行動を起こしていかなければいけないと思った。

二年間みんなとたくさん学びを共有することで、貴重な学びを得る事が出来、それぞれが看護観を発展させる事ができた。指導者さんを始め病院スタッフ、先生方、クラス全員の協力があつたからこそできたことだと思ふ。そして何より、このような機会を与えてくれた患者さん、ご家族に感謝したい。

二年間の学びを忘れずに、今後医療に携わるものとして日々成長していきたいと思ふ。

（十四期生一同とクラス担任 山口人美）



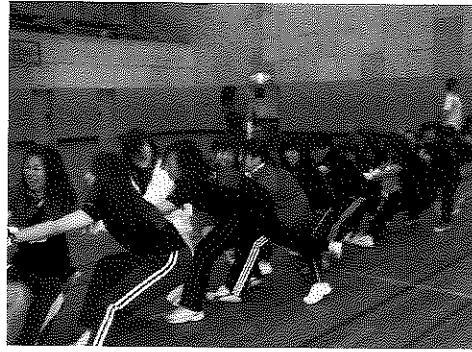
老年期実習（健康学習会）

歌が好きな患者さんが多かったため、皆で言葉遊びをしながら嚙下体操をして最後に歌をうたいました。

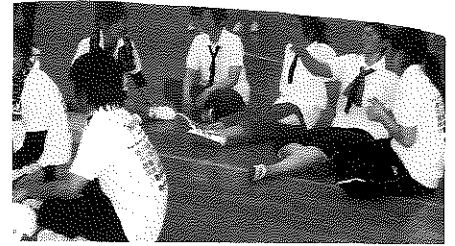


優勝 祝いの舞

体育祭



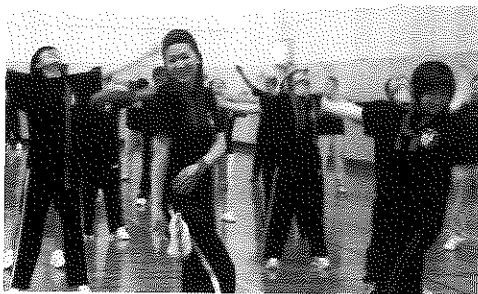
ラ・ラ・ライ体育祭 へはじまるよよ〜



フットワークも軽く



頑張るぞー オォー



体操だいすき♡

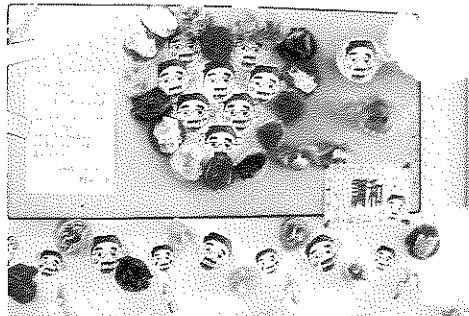
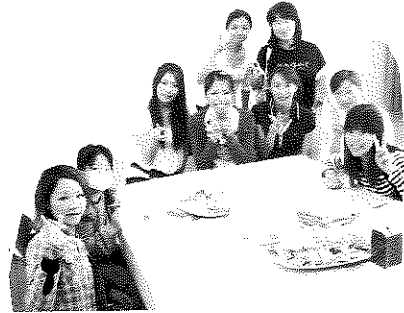


先生達も、学生達には
負けません♡





第24回東葛祭



長谷川・中村「調和」をテーマにコラボしました。みんなの思い思いの作品、まさに調和でした。



死の病棟…

300人もの人を、きょうふへおとし入れた…

さあ…おいで…

悪魔のナースたち☆

毎年恒例のおばけやしき正直子供は泣きまくってました☆

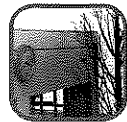
全学年、クラス共同で1つの病院(テーマはチャッキー)を作りあげました☆☆



野田さんの“轍”素晴らしかったです。



キラリ
学ぶ青春



小林功
モノクロ写真館



社会保障ゼミ



新入生合宿



入学オメデー



在宅看護論実習



リラクゼーション実習・指圧



田植え



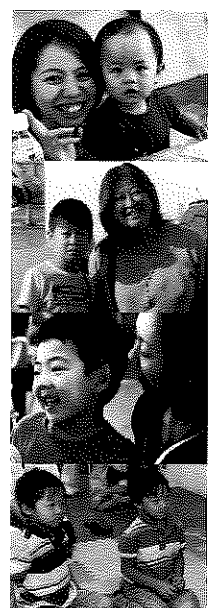
千葉県下看護学生研究発表会



見えない人への食事介助実習



キャッピングセレモニー



子どもたちに
支えられて



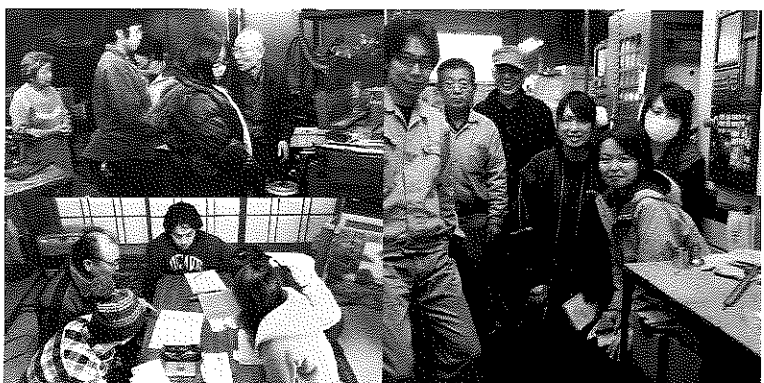
生活と労働フィールド（新川耕地で）



健康学習会



東葛祭（アーチ看板係デス）



泊まりこみで地域フィールド（町工場へ、農家へ）